

よみがえった 青銅器のクニ

かんばこうじんだに
神庭荒神谷遺跡から
のメッセージ

銅剣358本の大発見

1984年夏、^{ひかわ ひかわ} 簸川郡斐川町の南にある小さな・^{かんばこうじんだに} 神庭荒神谷で起こった出来事が、全国紙の一面を飾りました。日本中の注目を集めたこのニュースによって、それまで「^{いずも} 出雲神話」というナゾのペールで包まれていた古代出雲は、はじめてその片鱗を現すことになるのです。

それは、銅剣358本の発見でした。今や青緑色にサビついた金属板ですが、はるか約2000年前には、古代出雲人によって神祭りを行うときに使われていた神聖な宝器です。1984年当時出土していた銅剣の数は、日本国内すべてを合わせても300本程度でした。荒神谷で発見された銅剣は、この数をはるかに上回るものだったのです。

さらに1985年には、銅剣の近くから同じく祭器として使われた銅矛16本と銅鐻6個が発見されました。日本の青銅器分布図を塗りかえたこの大量の青銅器は、出雲神話成立の背景を究明するうえで、貴重な資料として現代によみがえったのです。



荒神谷遺跡

上空から斐川町を望む

斐川町は、斐伊川・宍道湖に面した豊かな平野を持っているが、荒神谷遺跡は、この平野から離れた、南の谷のずっと奥地に位置している。なぜこのような人里離れた場所に銅剣が埋められていたのか、ナゾは深まるばかりだ。



銅剣に続いて出土した銅矛と銅鐻



銅鐻と銅矛を丁寧に掘り出す調査員。一瞬の気のゆるみも許されない。



新たな青銅器を求めて、最新のレーザーで地下を探る。

調査結果が待たれる、ナゾに満ちた荒神谷遺跡

発掘された銅剣は、一つひとつ詳細な図面を取られ、本体がどういう金属でできているのか、分析が始められました。その結果、1本だけが朝鮮半島産の鉛を混ぜたもので、残りの357本は中国産の鉛を混ぜたものだという事です。そのため、朝鮮半島の鉛を使った銅剣をモデルに、中国産の鉛を使って残りの銅剣が作られた可能性が高いとも考えられます。また約300本以上の銅剣の把手の部分(茎)には、「x」印がはいっていることもわかりました。

この銅剣の成分の違いや「x」印が何を意味しているのか、現在でも不明な点が多く、今後の課題はまだ山積みです。

1984年に発見された荒神谷遺跡の調査研究はまだ始まったばかりですが、調査が進むにつれてさまざまな疑問点が解明されていくにちがいないとあります。また、やがてすべての銅剣が化学的な保存処理を受けて、永久保存できるようになり、一同に公開される日も来ることでしょう。



銅剣の茎(把手部)に刻まれた「x」印



荒神谷から出土した銅鐻群

山陰地方に多く分布する、「出雲型銅剣」荒神谷から出土した銅剣は、「中細形銅剣」類と呼ばれるもので、出雲を中心とした山陰地方に多く分布することから、「出雲型銅剣」とも呼ばれる。



銅矛の「刃」が語る「出身地」
荒神谷遺跡から発見された16本の銅矛のうち、7本は刃の部分が矢羽のように研ぎ分けられている。同じ形の銅矛が、銅矛の本場・九州北部に多数あることから、荒神谷の銅矛は九州北部から運ばれたものと考えられる。



銅剣の出土状況



何の変哲もない山林から、誰がこの大発見を予測したであろうか。



あらかじめかけていたその時、最初の銅剣が見つかった！



銅剣にガーゼをあてて薬品を塗り、慎重に取り上げる。



一本一本に添木をあて、銅剣を取り上げる。気の遠くなる作業がつづく。



偶然の発見から精密な発掘調査へ

荒神谷遺跡の発見は、まさに偶然と幸運によるものでした。宍道湖南部農道の建設計画に伴い、予定ルート内に遺跡がないかを確かめるため、小さな範囲を試験的に発掘するトレンチ(試掘溝)が数カ所にもうけられました。この作業は特殊なものではなく、大規模な開発の前には必ず行われるものです。どのトレンチもさしたる成果がなく、調査員も「もうここには何もないうら」と落胆したその直後に、「銅剣の発見」という大事件が起こったのです。

その後、島根県の教育委員会では、国立の研究所や各大学などの協力を得て、この付近の発掘調査に取りかかりました。それは、表土の除去から銅剣の取り上げまで、かつてないほど精密で根気のいる作業でした。この作業の連続によって、荒神谷遺跡の実態が、徐々に明らかになってきたのです。



上空から見た荒神谷遺跡